

〈共同研究報告〉

東アジアにおける学芸諸概念とその編成史

——国際共同研究とその方法の提案

鈴木貞美

学芸概念編成史とは何か。学芸は学問と芸術のこと。概念編成史とは、概念の体系ないしは秩序が、歴史的にどのように編みかえられてきたかを解明する研究のことである。

まず、概念史研究は、あらゆる学問研究の不可欠な基礎である。概念の変化を知らなければ、過去の同じ語に現在の概念を投影する誤りは往々にして起こる。たとえば「純文学」という語は、一八九〇年代に日本で造語されたもので、大学の文学部などに用いられる人文学を意味する広義の「文学」に対して、言語芸術を意味し、「美文学」とも別称された。人文学の内の哲学、史学に対する「文学」という用法が次第に増え、一九一〇年前後に狭義の「文学」として成立する¹⁾。この「文学」の広義と狭義は、第二次大戦期まで認められる。これと一九六〇年代初頭に確立する「大衆文学」に対する「純文学」とは、まったく異なる意味であることは、すぐ了解されよう。

しかし、「純文学」対「大衆文学」というスキームを分析に用いて、徳川時代や明治期からの小説全般を分類するような時代錯誤が、第二次大戦後の名だたる学者や批評家たちによって行われてきた²⁾。そもそもあまたの小説を芸術性ないしは思想性と娯楽性の多寡を基準に、二分することなど、原理的に不可能である。近代の詩や戯曲では、そんなことは行われていない。

それゆえ、「純文学」対「大衆文学」というスキームを廃し、それぞれの時代の小説ジャンルの編成とその価値を明確にすることに、日本の小説史は書きかえられる。

そして、概念編成史の研究は、これまで分析概念と当代の概念とを混同してなりたってきた研究を覆し、まったく新しい文化史研究をひらくことができる。たとえば、これまで社会科学の分析概念として、多く用いられてきた「封建制」は、史的唯物論における「隷制—封建制—資本制—社会主義」という発展段階論に立つもので

ある。しかし、中国清代において用いられていた「封建」は、異民族支配のもとで分権制を主張するもので、地方の特色を生かすうる世襲制の主張も行われた。その対立概念は中央集権を意味する「郡県」であった。徳川時代の日本にも、その論議が受け入れられ、「封建制」が是とされた。が、たとえば山鹿素行は、やや「郡県」に傾いている。⁽³⁾ 異民族支配を受けておらず、その論議の前提となる科挙制度も採用されておらず、古代から世襲制が定着していたにもかかわらず、である。徳川幕藩体制は、集団の管理権の委託関係によるしくみによってなりたつもので、ヨーロッパの“feudalism”とも中国の「封建」制ともまったく異なる特種な二重権力を職分集団ごとにつくりだすものであり、その職分集団ごとに、内部に階層がつくられていた。

ところが、人びとを身分制度から解放し、「四民平等」を宣言した明治維新後、徳川時代の世襲による職分・身分制度が「封建制」といわれるようになった。さらに、日本の一九二〇年代のマルクス主義者たちは、徳川時代を資本制以前の段階という意味で、「封建制」と呼んだ。さらにコミンテルンの一九三二年テーゼは天皇をいだけ近代日本の統治システムを「(半)封建制」と呼び変えた。同じことばでも、それぞれの立場によって、その意味がまるでちがっていたのである。概念とその価値観とを歴史的に相対化すること、それによって、実態に迫る新たな文化史、社会史にむかうことができるとは、ここに明らかだろう。

しかし、本研究は、このような一分野の概念史の研究にとどまるものではなく、学芸全体におよぶ概念のしくみについての知の共同作業を提案するものである。概念史研究は、ともすれば、ひとつの概念の形成から変化の過程を追うことに終始しがちで、その概念のそれぞれの時代の知の全体における相対的な位置の解明がおろそかになりやすい。学芸概念編成史とは、学問の秩序ないしは体系が編みかえられてゆく様子を明らかにする研究である。すなわち構造研究と歴史研究との総合と言いかえてもよい。

東アジアにおいて古代から近世にわたる学芸の歴史は、ヨーロッパとはまったく異なる編成をもつ中国のそれを基本にしつつも、朝鮮半島と日本において、それぞれ独自に推移してきた。日本においては漢訳洋書の解禁から蘭学の流れが形成され、一九世紀以前にもヨーロッパの宗教や学術が伝えられてはいたが、それは知識層の一部にとどまっていた。ところが、一九世紀半ば、上海でキリスト教宣教師と中国人の「秀才」(科挙で官吏として採用にはいたらなかった人)との協力によって大量の西洋新知識が翻訳され、それが日本にもたらされるやいなや伝統観念の大きな変容、すなわち学芸概念編成の組み替えがはじまった。列強の植民地にされるかもしれないという危機を敏感に感じた日本は、欧米に知識人を派遣し、また欧米諸国から知識人を雇い入れ、学芸の近代化の先陣を切った。

伝統的に文章による学問、すなわち「文(の)学」の内部は「経・史・詩・集」に分類されてきたが、近代的な大学制度において「文

学(広義)」部の内部は「哲学」・「史学」・「文学」(狭義)へと編成が変えられた。それは伝統的な概念をリセプターとして西洋知識を受け入れ、その土台を組み替えることによって行われた。日本では、明治以前に、和歌や物語が、「文学」と呼ばれたことは一度もなかったが、新しい概念編成によって、それらは広義の「文学」すなわち人文学の対象となり、また狭義の「文学」、言語芸術とされたのである。その組み替えには、日本と中国との文化的土壌のちがいが作用して時間差があったが、総じて、西洋諸国の学芸編成とは異なる体系が築かれた。

日本と中国との文化的土壌のちがいは、西欧の「literature」の概念に対する態度に端的に見られる。「literature」の広義は著述一般、中義は洗練された文字による著述、すなわち人文学、狭義は文字による言語芸術を意味する。その文字による言語芸術、すなわち詩、小説、戯曲は、ロマンティズムの価値観により、創造的で想像的なものを尊重するものだった。中国の読書階級も虚構の類を娯楽の対象にしたが、伝統的に嘘を退け、虚構を蔑視する精神が支配的であり、さらに朱子学は、この傾向を推し進めた。それゆえ虚構を尊重する狭義の「literature」は受け入れ難く、したがって「文学」の編成替えは起こりにくかった。

それに対して、徳川時代の日本では、たとえば虚構を通してこそ真実が語りやすいという浄瑠璃台本作者、近松門左衛門の考えが民衆文化のなかにかなりの力をもって展開していた。また、物語・小

説をひとくくりにしてジャンル史を書こうとするような考えも曲亭馬琴とその周辺には発生していた。それらによって、狭義の「literature」の受け入れが容易であった。

ただし、当初、受け入れる際に、西欧における狭義の「literature」が民衆の文芸(popular literature)を排除するものであることは無視された。しかし、やがて、日本のシェークスピアと称された近松門左衛門と、儒学を中心に物語を書いた曲亭馬琴を除いて、民衆の文芸は蔑視されることになる。ところが、リベラルな思潮が台頭することにより、もう一度、人情や世相をリアルに活写する井原西鶴の作品なども復権してゆく。このように価値観の変容が、学芸の編成の変化に作用しているのだ。

そして、二〇世紀前期に日本に留学した知識人たちによって、言語芸術という意味をもつ新概念である「文学」が中国にもちかえられ、一九三〇年代の「文学革命」にまで発展する。「文学は子游、子夏」からきりとなってきたものではなく、日本から輸入したものの、彼らの英語 literature に対する訳語なのだ」という魯迅「門外文談」(一九三五)の一文は、そのことを、よく語っている。

他方、明治期の日本において西洋諸国の学芸の編成とは異なる体系が築かれたことは、大学の制度が端的に示している。一九世紀の欧米において、自然科学(natural science)と工学(technology, engineering)の乖離ははなはだしく、工学は総合大学(University)の内部には組み入れられず、単科大学(college)しかなかった。しかし、

日本の帝国大学は「工科大学」を組み入れて発足した。朱子学の「天理」によって、自然科学が対象とする自然の法則性を受け止めたことは中国でもかわりなかったと思われるが、日本の知識層の主体は士大夫でなく、武士であった。この層が西洋の軍事技術の発展に敏感に反応した。

そして、それは、ちょうどイギリスを中心に、工学がエネルギーの学としてアカデミズムの一角を占めるようになった時期にあたった。帝国大学のうちに「工科大学」が設けられたことには、文化基盤と歴史的条件のふたつが作用している。⁽⁴⁾

また欧米諸国の大学はキリスト教の神学部を中心にもつ構成において発展してきたが、日本の大学はそれにあたる学部を設けず、欧米においては神学部が付随する宗教学を文学部哲学科のなかにおいて。そして、大学のこのような学部編成は二〇世紀前半を通じて中国・韓国にもおよび、今日に至っている。

制度のちがいは、学問それぞれの内容にも変化をおよぼす。イギリス・フランスにおいて、人文系の学問は、基本的に神学に対して人間についての学問を意味する。しかし、ドイツにおいてプロテスタンティズムは学芸全般に浸透していた。そのドイツの影響を強く受けたために、また儒学が人間に関する学問という性格を強くもっていたために、日本近代の学芸は「宗教」と相互浸透して発展してきた。

西欧ロマンティズムの学芸は、キリスト教の精神支配に対して

ギリシアやローマの神話世界、土地の神や風の神、また東洋の神がみを好んでとりあげた。これにならって、日本における学芸のロマンティズムは、たとえば岡倉天心が道教の「気」の觀念に立つものと同一視して、禅宗の精神文化に東アジアの近代芸術を見ようとしたように、東洋や日本の宗教的テーマを好んでとりあげた。⁽⁵⁾ これは自国の支配的宗教(近代になってつくられた「国家神道」——皇室の祖先崇拜は「宗教ではない」と規定することにより、これと抵触しない範囲で信教の自由を認めた)との精神的な緊張は生まれず、むしろ積極的に融合するものもあつた。東京帝国大学憲法学教授、寛克彦の国体論が代表的で、これは日中戦争期に軍部・右翼の理論的支柱として機能した。⁽⁶⁾

このように西洋近代のそれを参照して、新概念をつくりだしつつ、伝統的な概念編成が近代的に組み替えられてゆく様子を研究するには、西洋と東洋、また西洋内部、東アジア内部での文化の差異をよく吟味し、受け入れる際の歴史的条件と価値観の変化を勘案しなければならぬ。そのための作業手順を以下にまとめておく。

1 概念編成、すなわち、上位、同位(類義と対立)、下位の内部編成に留意すること。何に対して言われているかに注意して、文脈から判断する習慣をつけること。

なお、一般に流布しているものを「概念」とし、特定身分や専門分野内のそれを限定つきの「概念」、個々人のそれを「觀念」と区別するのが議論の混乱を避けるのによいだろう。

2 受容器として働いた伝統的概念とその価値観、歴史的條件の吟味。中国の伝統的概念編成の推移と西洋近代の概念編成の双方に通じていることが必要だが、西洋概念の受容器の役割をはたした伝統概念と、その価値観を研究することによって、これらは相対化され、次第に解明されてゆく。

3 創始者とその周辺の領域(外交文書、官庁用語、専門分野など)、思想的立場の分析

なお、当該の概念に関する個々の知識人の観念(専門分野、思想的立場、観念の輸入元、他への影響など)の研究は、全体におけるケース・スタディーにあたり、全体と個別の相互性において発展してゆくことになる。

4 流布と定着の経緯、新聞や雑誌などメディアの性格による用語の差異の分析、辞典、事典類、教科名や教科書の分析

5 今日にいたるまでの、その後の組み替えの分析。これは、今日のわれわれの概念および概念編成を歴史的に相対化する作業となる。

6 各分野内については、先にあげた「封建」の例のように、分析スキームの形成についての分析が必要となる。

このような研究は、とてもひとりの手でなしうるものではない。語彙史、学術史など別の方法によって展開してきた先行研究をよく検討するとともに、各自が、上記の、どの項目の作業を担っているかを自覚し、知の共同作業、すなわち研究運動として展開してゆく

べきものであるということを付言しておく。

注

(1) この「純文学」の端的な用例は「哲学と純文学とは科がちがう」(夏目漱石『虞美人草』)に見られる。これを単に「文学」と称する用例は「自然主義」の勃興とともに多くなるが、一般化するのには、「芸術」(広義は学芸一般、狭義は美的鑑賞の対象すなわち広義の「美術」の内から、絵画、彫刻という視覚芸術を意味する狭義の「美術」が定着する時期に当たっている。つまり、狭義の「芸術」すなわち広義の「美術」のうちに、狭義の「文学」と「美術」がならぶ編成となり、安定・定着したことを意味する(これについては、鈴木貞美『「芸術」概念の形成、象徴美学の定着』、鈴木・岩井編『わび、さび、幽玄——「日本的なるもの」への道程』水声社、二〇〇六を参照されたい)。

(2) 「大衆文学」は、「文壇文学」「芸術文学」を対立概念として、一九二〇年後半に運動として成立し、定着した概念で、その内に「時代の」——創作講談の展開、ないしは、それに刺戟されたもの——と「探偵小説」をふくむものだった。すなわち菊池寛らの「通俗小説」すなわち当代風俗小説は「文壇小説」と呼ばれ、この運動から排除されていた。それは都市大衆文化の有力な一翼をなし、職業作家が輩出して既成文壇に対する「大衆小説文壇」を形成、小説は娯楽性を強めて、エロ、グロやナンセンスの傾向を低俗化してゆく。これが新聞や大衆雑誌に進出すると、既成文壇にも通俗性の

高い題材をとる傾向が見られる。また一九三五年前後に、「大衆小説」に一定の質の向上も見られるが、同時に、再編成が起こり、「時代小説」「探偵小説」、ユーモア小説などの「通俗小説」を加えた。そして、このころから、主として『新潮』系のグループが非政治的な芸術文学の意味で「純文学」を用いはじめ、やや流通するが、定義されることなく、概念化されたとはいいがたい。

第二次大戦後には、「純文学」雑誌に対して、「中間小説」雑誌、そして「大衆文学」の三分類となるが、S.F、ショート・ショートなどは作品の質とは無関係に「大衆文学」に分類されていた。高度経済成長期に出版社系週刊誌が相次いで創刊され、「中間小説」が隆勢を誇りはじめると、「純文学」雑誌にも、その傾向をもつ作品が掲載されると、一九六一年に「純文学」変質論争が起こり、その論議を通じて、「純文学」対「大衆文学」スキームが定着してゆく。これによって「純文学」としての「時代小説」を「歴史小説」と呼ぶことも定着した。

しかし、一九八〇年代に、「純文学」雑誌が若年層を対象とする人気作家の作品に活路を見出そうとし、他方、「中間小説」雑誌に円熟した作品が多く見られるようになると、このスキームが形骸化していることは誰もが認めざるをえないようになる。が、雑誌の制度そのものは今日に至っている（これについては鈴木貞美『日本の「文学」を考える』角川選書、一九九二、および「中村真一郎『雲のゆき来』、あるいは『うまく作られた変貌』』井波律子、井上章一編『表現における越境と混濁』日文研叢書36、国際日本文化研究センター、二〇〇五、一二九―一三〇頁補注を参照されたい）。

他方、一九六〇年前後する時期から、「純文学」対「大衆文学」スキームは、研究・批評に用いられるようになり、中村幸彦『近世儒者の文学観』（一九五八）のように、徳川時代中期の「雅」と「俗」の文化区分を、これと同類のものとアナロジーする思考法を見せているし、明治期の「純文学」を「大衆文学」に対するそれと混同する者も出てくる（鈴木貞美『日本の「文学」概念』第三章2「近世の『文学』とジャンル意識」、作品社、一九九八を参照されたい）。

(3) 張翔・園田英弘編『封建・郡県』再考』（思文閣出版、二〇〇六）がこの問題を多角的に扱っている。

(4) 鈴木貞美『生命観の探究―重層する危機のなかで』（作品社、二〇〇七）第一章三節2、六節3などを参照されたい。

(5) 同前、第五章五節などを参照されたい。

(6) 同前、第九章六節を参照されたい。